

## 會員よりのたより

### 病者と天文

拜啓(前略)私は或る工場に働き居りし者ですが、不幸病を得て歸省致し、療養生活を送り居る次第で御座います。多忙なる工場生活は私生活を極度に壓縮させて居り、加へて、餘暇には仕事の参考書も讀まねばならぬ有様にて、永年天體への憧憬を持ちながら、研究することを得ずに居りましたが、幸か不幸か前述の如く病を得まして、此の三月中旬より氣候のよろしくなりましてより、毎夜觀測(鑑賞と申しました方が正しいでせうが)を續けて居ります。同好の者二三相寄りまして、八時の消燈時刻の前後の僅かな間を肉眼觀察をいたして居ります。次に「天體と病人の心理」と云つたものを、心付く儘に書きました、御参考に供したいと存じます。

病人の心理としまして共通的なものにて、夜は嫌なものであり、或る意味に於きまして恐怖を抱かしめさえます。これは不眠に因るものです。又恢復期の者は肉體的には良好でも、神経は之に伴はぬのが通常で、夜の時刻は、將來に對する悲觀的のみ材料を意識に浮き上らせてゐる状態です。天體を觀察し始めてよりの私達は、眠れぬ夜半は密かに戸外へ出て星座を眺め、或はベッドより窓外の梢の間に光る北極星の僅かな移動に心を躍らして他事を忘るゝ状態で、遂には眠れぬ夜を内心喜ぶ有様でした。ところが、どうしたことから、起きてゐたい筈の私達は、安眠を採れるやうになつたのです。人間心理現象の皮肉とでも申ませうか。尤も「就寝前の軽い散歩は安眠を促す」とは醫師も申されてゐますが、さうした醫學的な根據が偶然天體觀察と一致いたしたことは思はぬ御蔭で、喜びに堪へません。哲學の「宇宙は秩序である」とは、天體を研究して後始めて理解されるものだ、今更の如く明確に知りました。天體の知識の欠除は、宇宙を渾沌であるとし、その漠とした存在は、巨大な空間中に不安定に浮遊する星々を思つては、私は常に虚無的な感情に陥ち込むのでした。人間の存在價值を疑ひ、唾み合ふ社會を嫌忌するものでした。然し、餘りに整然たる天體の動き、その清楚さに襟を正し、生物は地球に於てのみその存在の可能なるを想ふとき、我々の生命の營みの尊さと、地球の運動、大氣や太陽の惠等に感謝せずには居られません。一木一草を見ても誠に有り難く、感謝の念を禁じ得ません。此頃では希望薄き病める私の身も、生命を與へられて生きてゐると云ふ事實を深く感謝の生活を送つて居ります。(下略)

五月23日

E. W. 生